ワーズワスの人間愛

――「ティンタン寺院」についての一考察――

関　　淳　子

要　旨

イギリス・ロマン派を代表する詩人ウイリアム・ワーズワス（William Wordsworth）の代表作である「ワイ河再訪に際し，ティンタン寺院の数マイル上流で書かれた詩」は，1798年に再訪したときのワイ河畔の印象を，5年前1793年に立ち寄ったワイ河畔のそれと比較して歌っている作品である。

5年前のワーズワスは，フランス革命への幻滅と絶望をワイ河畔の自然の中で癒そうとした。その時，彼は自然と融合するという神秘的体験によって恍惚感を得ることができた。しかし再訪したワイ河畔の自然に，彼はもはや感覚的な喜びを抱くことはできなかった。その変化は，彼の心に人生の無常感を抱かせ，ワイ河畔の光景は「静かで悲しい人間性の調べ」を奏でるものとなっていた。彼は静謐な光景になったワイ河畔での回想によって，5年前の恍惚感を蘇らせその喪失の意味を認識することができた。そして5年前の神秘的体験を原点とした，現実に生きる人間と自然が調和融合した，静かな喜びをもたらす思想に到達することができたのである。こうして彼の有限の生を生きる人間への愛は深まっていった。

最近は，様々なワーズワス研究がなされている。本稿では，作品「ティンタン寺院」を精読することによって，詩人の意識の流れを辿り，詩人の精神が自然との交わりによってどのように変遷していったかを考察したいと思う。

キーワード：ウイリアム・ワーズワス，「ティンタン寺院」，神秘的体験，静謐，回想

はじめに

最近のワーズワス研究についての主なものの一つに，ニューヒストリシズム（new historicism）という，1980年代から米国で盛んになった文学批評がある。文学作品も歴史を考察する要素であるという観点にたち，詩人の生きた歴史的時代的背景から作品を考察するものである。ワーズワスは，フランス革命と産業革命という激動の時代を生きた。レビンソン（Marjorie Levinson）は，ワーズワスが，「ティンタン寺院」で描いた光景は，当時ワイ河を航行していた貨物船，製鉄所，ティンタン寺院周辺にたむろしていた浮浪者を意図的に排除して，詩人の瞑想にふさわしい場所に変化させていると指摘している[1)]。レビンソンの考察によると，「ティンタン寺院」は現実から逃避した作品であるいう批評である。

地球環境学の立場からワーズワスの「ティンタン寺院」を読み直したジョナサン・ベイト（Jonathan Bate）は，彼の著書で次のように述べている。

「ロマンティック環境学」とは，人間は植物なしに，物理学的にも心理学的にも生きられないことを認識する故に，この緑の地球を尊重する学問であり，この地球には共通の一つの生命があり，地球は一つの大きな生態系であることを宣言するものである[2)]。

地球には共通の一つの生命があるというというベイトの考察は，後述するが，「ティンタン寺院」でも触れられている。ベイトは，ワーズワスを環境保護者として評価している。ベイトのようなワーズワス研究は，環境破壊問題に直面する現代においてもワーズワスの作品が注目されていることを示しているものである。

また1782年，ギルピン（William Gilpin）は『ワイ河旅行記』を著した[3)]。彼はワイ河をピクチャレスク（picturesque）「絵のように美しい風景」の一つとして取り上げた。その結果ワイ河を巡る旅行は流行した。ギルピンは，ワイ河を始め，湖水地方への美に対する関心を当時の人々に呼び起こした。ギルピンもワーズワスも旅の目的は，自らの足でワイ河畔を巡ることであった。そのことに端を発したピクチャレスク的な観点からの研究も最近よく見られる。大石謡子氏は，ピクチャレスク旅行者の自然の捉え方とワーズワスの自然の捉え方の違いを指摘している。大石謡子氏は，ピクチャレスク的な自然観では，自然の美は旅における最も需要な要素である移動中に発見されるのに対し，「ティンタン寺院」については移動に関する論考は少ないと，2010年に出版されたデーヴィス（Damian Walford Davis）の指摘を引用した。そして「ティンタン寺院」は，旅行者として不可欠な移動のなかで生み出されたものでないことからピクチャレスク的な批評は，「ティンタン寺院」におけるワーズワスの自然観を考察するにふさわしくないと指摘している[4)]。以上のように最近のワーズワス研究は，作品「ティンタン寺院」に広範囲な視点を提供するものであるが，詩人の精神から距離を置いたものが多い。

しかし「ティンタン寺院」で歌われている自然は，詩人ワーズワスの精神と深く結びついた自然である。拙論「ワーズワスの人間愛―「決意と独立」再考―」[5)]では，ワーズワスの短詩「決意と独立」のなかで詩人の精神が自然との交わりによって人間愛へと導かれていく過程を考察した。自然愛から人間愛へと辿る詩人の魂の成長は，ワーズワスの全作品の主題である。「ティンタン寺院」をこの視点から考察するには，まず「ティンタン寺院」を精読することから始めることが必要であると思われる。本稿では，ワーズワスが自らの詩の創作心理を述べた詩論をもとに，「ティンタン寺院」を精読することによって，詩人の意識の流れを中心にワーズワスの精神の変遷を辿っていきたい。最近のワーズワス研究から視点を変えた，このような詩人の精神を主体とした考察も「ティンタン寺院」の解釈に新たな理解を提供するものではないかと思われる。

序

イギリス・ロマン派のなかでも最大の詩人であるウイリアム・ワーズワス（William Wordsworth）は，1770年に，崇高な自然美にあふれたイギリス湖水地方に生まれた。幼くして両親を亡くした彼を詩作へと導いたのは，自然に対する愛情と妹ドロシー（Dorothy）の助力であった。彼は，「詩人の魂の成長」（“Growth of a Poet’s Mind”）という副題が付けられた『序曲』（*The Prelude*）の中で幼少期の自分を自然によって「選ばれた子」（“a chosen son”）（*The Prelude*, Book 3, 82）と呼び，幼少期は「美しい種まきの時期」（“Fair-seed time”）（*The Prelude*, Book, 1, 305）であったと述べている。それは自然が詩人の想像力に与えた教育の期間であった。彼は，自分の心から湧いてくる自然との交わりを詩に書くことを自分の使命としていた。それは彼の想像力に基づくものであった。「ティンタン寺院の数マイル上流で書かれた詩」（正式の題は，“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour. July 13, 1798”）（以後「ティンタン寺院」と表す）は，彼の人生観，自然観を最もよく表している作品として「霊魂不滅の頌」（“Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” 以下 “Ode” と表す）と共に評されている。ワーズワスは1793年に1人でソールズベリー平原（Salisbury Plain）からウエルズ（Wales）に徒歩旅行中に立ち寄ったティンタン寺院から数マイル上流のワイ河畔を，5年後の1798年に妹ドロシーと共に訪れた。「ティンタン寺院」は，再訪したワイ河畔を望む光景の印象を5年前のそれと比較する形態で歌われている。ブルーム（Harold Bloom）は，この作品は短詩で，『序曲』の縮小（“miniature”）であると指摘している[6]。すなわち『序曲』の主題が詩人の想像力（imagination）であったように，「ティンタン寺院」の主題も詩人の想像力であったと言えよう。『序曲』は，自然との交わりによって想像力が湧き出てきた幼少期から，30代頃までの自己の精神の内面の成長が自叙伝的に語られている。『序曲』は，フランス革命という時代風潮によって一旦は見失なわれた想像力が大自然を前に回復された過程を，人間の高貴な精神を語っている長編詩である。セリンコート（Ernest de Selincourt）は，1793年のワイ河畔訪問時のワーズワスの心境にもフランス革命の理想と，その幻滅による精神的危機の影響があることを指摘している[7]。そして5年後の1798年，再訪したワイ河について，ワーズワスは次のように述べている。

> 思い出すと，これほど楽しい状況で作られた詩はなかった。私はワイ河を渡ってからティンタンを離れた時に作詩を始め，4，5日妹と散策してから夕方ブリストルへ入った時に，この詩を完結した[8]。

彼は28歳で「ティンタン寺院」を完結した時，「楽しい状況」という心境に到達していたと言えよう。

「ティンタン寺院」は，5連，159行から成る。「ティンタン寺院」は1798年に再訪した静謐な自然と人間が調和されたワイ河畔の光景描写から始まり，最終連第五連で詩人の妹ドロシーへの呼びかけによって，自身の到達した心境を歌っている。5年前の主に視覚による自然の感覚美の陶酔，「うずくような喜び」（“all its aching joys”）（“Tintern Abbey” 84）「目くらむ恍惚感」（“all its dizzy raptures”）（“Tintern Abbey” 85）は失われてしまったが，その喪失に代わる「豊かな償い」（“Abundant recompense”）（“Tintern Abbey” 88）を与えられたことを告げている。それは人生の苦悩を通して得られた心をきよらかにし，なごめる力を持った「静かで悲しい人間性の調べ」（“The still, sad music of humanity”）（“Tintern Abbey” 91）を聞きながら自然を眺めることができると同時に，自然だけでなく，人間の心の中にある，一つの存在を感じることができるようになったことである。ワーズワスは，詩的能力の衰退だけでなく，生と死という問題に向き合っていた。ワーズワスが到達した「楽しい状況」という心境とは，孤独，恐れ，苦しみや悲しみをも癒す「穏やかな心あたたまる思い」（“healing thoughts / Of tender joy”）（“Tintern Abbey” 144–145）でもあったと思われる。拙論「ワーズワス『ティンタン寺院』」では，自然の感覚美の陶酔から成熟して平静な喜びに到達した詩人と自然との関係を考察した[9]。本稿では，「ティンタン寺院」を主に扱うが，詩人の詩的能力の喪失と新たな代償という同様のテーマを持つ『序曲』や「霊魂不滅の頌」を参照にしながら，フランス革命への傾倒による精神的危機に打ち勝ち，さらに人間の死すべき運命を強く自覚した詩人ワーズワスが到達した，自然と人間が深く入り混じった円熟した心境を考察したい。

1.　再訪した静謐なワイ河畔の光景

再訪した静謐なワイ河畔の光景は，ダンビー（J. F. Danby）が述べているように，単に外的な自然だけではなく，外的な自然と詩人の心の中に映る自然が共存する「心的な風景」（“mental landscape”）[10]である。ズラント（Geoffrey Durrant）は再訪した楽園のようなワイ河畔の光景について次のように述べている。

> ワーズワスにとって楽園は，彼の精神によって完全に統一され調和された世界である。そしてこの最初の連で読者は，ワーズワスの想像力が，彼の観察している光景に秩序と調和を課しているのを見る[11]。

ワイ河畔の光景は，詩人の想像力（“imagination”）によって調和が保たれた世界になっていると言えよう。

「ティンタン寺院」は，再訪した静謐なワイ河畔の光景描写によって始まる。

第一連
5年は流れ去った。5度の夏と
5度の長い冬の歳月が。そしてふたたび
私は耳にするのだ，山中の泉から流れ出て
快い奥地の囁きをたてる川音を。―今一度
私は目にするのだ，荒涼懸絶の景に
更に深い懸絶の思いをきざみ
地上の眺めを空の静けさと結びつける
この険しく高い断崖を。
此処，小暗いかえでの下に憩い
農家の地面，果樹の茂みを眺める日が
ふたたび私にめぐって来た。
その茂みは折ふしの季節に未熟の実をつけ
一色の緑の色合いをおびながら
森や林にとけこんでしまっている。今一度
私は目にするのだ，この生垣を，生垣とは名ばかり
気儘に生い茂る灌木の小列を
青々と戸口までつづく牧歌的な農家を
木の間から音もなく立ちのぼる
煙の渦を。―それはさだかでないが
家なき林の漂泊の民か
焚火のそばに隠者のひとりすわる
隠者の洞穴のありかをかたる（“Tintern Abbey” 1–22）

5（“five”）と繰り返される音から，詩人が5年という時間の経過を意識していることが窺える。「快い奥地の囁きをたてる水音」（“a soft inland murmur”）（“Tintern Abbey” 4）は5年前と変わっていなかった。その奥地から流れ出る水音を再び聞いている詩人に5年前のワイ河畔での記憶が蘇る。「霊魂不滅の頌」では，大海の岸辺でたわむれている子供の姿が歌われている。（“Ode” IX, 165–171）大海を永遠不滅の世界にたとえ，この世に生まれることは，大海の岸辺に上陸して，成長とともに奥地に入ることだと述べられている。奥地にいる大人は，回想によって不滅の大海の岸辺に回帰し，少年時代の自然との交わりを追体験できる。ここでワイ河の奥地から流れ出る「快い奥地の囁きをたてる水音」を耳にしている詩人の精神は，少年時代の自然との交わりを回想できる静謐な状態にあることを暗示している。

視覚によって描写されている険しい高い断崖は，荒涼懸絶の景の中にいる詩人の心に「更に

深い懸絶の思い」（“Thoughts of more deep seclusion”）（“Tintern Abbey” 7）を刻み，空の静けさと結びつく。今再訪して目にした風景は，5年前の感覚によってとらえられた険しい高い断崖ではなかった。5年前の荒涼な光景は，より深い隔離された思いを与えるものとなった。詩人が目にする険しい高い断崖の光景は，以前のように恐怖を与えるのではなく，空の静けさと結びつけられ，調和融合し，静謐なワイ河畔の光景に変化していたのである。「今一度」（“once again”）「これらの」（“these”）という繰り返される音は，これらの再訪したワイ河畔の光景の描写は，現実のワイ河畔の自然そのものを描写しているのではなく，詩人が現在と過去を結びつけながら，詩人の想像力によって調和が保たれた光景，「心的な風景」を扱っていることを読者の心に留める働きをしている。詩人にとって現在目にしているワイ河畔の光景は，5年前の「うずくような喜び」「目くらむ恍惚感」という自然の感覚美の陶酔を与えたワイ河畔の光景ではなかった。

詩人は，ふたたび小暗いかえでの下に憩い，農家の地面，果樹の茂みを眺めることになった。春と平穏さを連想させる緑の色合いをおびながらも森や林にとけこんでしまっている果樹の茂みと，気儘に生い茂る灌木の小列である生垣，戸口まで緑で覆われた牧歌的な農場は，人間の存在を気付かせるものでありながら自然の荒涼さと融合している。ワイ河畔の光景は，「半ば自然的な楽園」（“half-natural paradise”）である[12]。

さらに詩人の眼は，木の間から立ち昇る煙に向けられる。その煙は家なき林の漂泊の民か，洞穴の焚火のそばにひとりすわる隠者のものかと思いを巡らしている。ベイトソン（F. W. Bateson）はこの箇所について，隠者の描写は18世紀後期の伝統的な所産であると指摘している[13]。「それはさだかではないが」（“With some uncertain notice,”）（“Tintern Abbey” 19）という言葉で語られる詩人により想像された隠者の姿は，ワーズワスの後期の長編『逍遥』（*The Excursion*）に登場する「旅商人」（“Wanderer”）へと発展していったと思われる。ジェラール（Albert S. Gerard）は，このようなワーズワスが創作した自然と半ば一体化した人間が，「苦悩する人間の象徴」（“an emblem of suffering mankind”）になり，第三連で歌われている「静かで悲しい人間性の調べ」（“The still, sad music of humanity”）（“Tintern Abbey” 91）の伏線になっていると指摘している[14]。音もなく立ちのぼる静かな煙の渦は，詩人の静謐なこころの状態を象徴しているかのようである。

ここで描写されている静謐なワイ河畔の光景は，『序曲』第12巻で述べられている「静かなこころの状態」にある詩人の精神を映していると言えよう。

> 人間の感動は，自然から生まれる。そして静かな
> こころの状態もまた，まったく同じように自然の賜物なのだ。
> これが自然の栄光なのだ。この二つの性質こそ，
> 自然の大いなる力を構成している一対の角である。

この二重の働きこそ，自然が授け給うすべてのもののもつ
日光であり，恵の雨であり，そもそもの初めにおいても
また結末に至っても，同じように慈悲深いものなのだ。
そのゆえにこそ，静と動との交互作用によって存在する
天才が，自然のうちに，もっとも純粋で，
最良の友を見出し，また，その自然から
真理を探究するあの活力をくみとり，やがて
目覚まされ，憧れ，つかみ，もがき，切望し，渇望し，
ついに強いて求めなくても，それを受けるのにじゅうぶん適わしい
あの幸福な，こころの平静さを自然からうけとるのだ。
（*The Prelude*, Book 12, 1–14）

5年前の主に視覚による自然の感覚美の陶酔，「うずくような喜び」「目くらむ恍惚感」と，5年後再訪した静謐なワイ河畔の光景に投射されている詩人の「静かなこころの状態」（moods / Of calmness）（*The Prelude*, Book 12, 1–2）という相反する二つの性質は，共に自然から授けられるものである。

「静かなこころの状態」にあって，詩人の5年前のワイ河畔での感覚美の陶酔の記憶は時間によって静められ，浄化された。これはワーズワスの「抒情民謡集序文」（“Preface to Lyrical Ballads,” 1801）で述べられている詩論を想起させる。ワーズワスは「抒情民謡集序文」で，「静寂のうちに回想された情緒」について次のように述べている。

> 私はさきに，詩は力強い感情が自然に溢れ出たものであるといった。詩は，静かに思い出された情緒から発生するものである。その情緒は，いつまでも瞑想していると，一種の反作用によって，その平静さをだんだんと失っていく。そして前に瞑想の対象となっていた情緒に類似したある情緒が，だんだんとできあがってきて，それ自身が実際に心の中に存在するようになる。成功した創作はこういう気分で一般に始められて，これに酷似した気分で続けられる。しかし，いろいろの原因のために，どんな種類の，どんな程度の情緒でも，いろいろの快感によって加減されるのであるから，どんな情熱を描写することにしても，自分が進んでそれを描写しようとするときは，大体において心は一種の愉快な状態にあるだろう[15]。

詩人は，5年前の感覚によってとらえられた荒涼なワイ河畔の自然美との交わりに恍惚の境地に達することができた。しかし再訪した今，詩人が目にした5年前と変わらない現実のワイ河畔の光景は，静謐な光景になっていた。第一連で描写されている光景は，「静かなこころの状

態」にあって「静寂のうちに回想された情緒」(“emotion recollected in tranquility”) から発生したものである。回想されることによって，平静さが失われた時に，5年前の感覚によってとらえられた荒涼な光景は，調和と統一が保たれた静謐な光景になった。いろいろな激情は，静寂のうちに回想されることによって，時間によって緩和され喜ばしい状態になる。アダムズ (Hazard Adams) は，現実を模倣することは，ロマン派詩人とって詩人の精神を表現することであると述べている[16]。この静謐なワイ河畔の光景描写は，「静かなこころの状態」にある詩人の精神の表象であると言えよう。瞑想に耽る詩人に，木の間から立ち昇る煙の渦のように，5年前のワイ河畔での記憶が溢れ出るのであった。

2.　5年前のワイ河畔の光景の記憶

第二連
久しく遠ざかってはいたが
私にとって，これらの美しい形象は
盲人の眼における風景のたぐいではなかった。
しばしば，淋しい部屋で，また町や都の
ざわめきの只中にあって，疲れを覚えるとき
血管をめぐり，心臓にふれ，私の清らかな心に入り来って
静かな回復をもたらした
あのこころよい感覚は，これらの形象のもたらしたものだ。
それに忘れ去った喜びの気持と—それは恐らく
善き人の生涯の最善の部分に
ささやかな，名もない，憶えてもいない
親切と愛の行為に
いささかならぬ影響を与えたものだ。
私はまたそれらの形象に
もっと気高いすがたの他の賜物を
負っているかも知れない。
それは神秘の重荷を，不可解な世界の
耐えがたくわずらわしい重荷を
軽めてくれる浄福の気分だ。
それに浸るとき，愛情が
われらを穏やかに導き

ついにはこの肉身のいきづかいも
血の運行さえもほとんど停止して
肉体は眠り，われらは生ける魂となる
あの澄んだ浄福の気分だ。
そのとき，調和の力と，喜びの
深い力になごめられた眼で
われらはものの生命を透視するのだ。（“Tintern Abbey” 22–49）

5年前，詩人に感覚的陶酔を与えたワイ河畔の光景は，淋しい部屋や都会のざわめきのなかにあっても明瞭に思い起すことができた。しかしそれはワイ河畔の自然物そのものではない。都会の孤独の中で，詩人の記憶にあるワイ河畔の光景は「美しい形象」（“these beauteous forms”）（“Tintern Abbey” 22）であった。5年前のワイ河畔の光景は，回想されることによって，詩人の純粋な心に入って「こころよい感覚」（“sensation sweet”）（“Tintern Abbey” 27）をもたらしてくれた。そして詩人の精神は慰められ，「静かな回復」（“tranquil restoration”）（“Tintern Abbey” 30）を与えられた。これは，ワーズワスの短詩「水仙」（“I Wandered Lonely as a Cloud”）を思い起こす。詩人はひとりさまよっていた時に，大群の水仙に出会う。喜び踊る水仙の光景に孤独感を抱いていた詩人の心は陽気になった。このことが後にどのような富をもたらしたかは，その時気付かなかったが，その後思いに沈む時，水仙の光景は，内心の眼（“that inward eye”）（“I Wandered Lonely as a Cloud” 21）にひらめくようになって，詩人の心を喜びで満たしたのだった。水仙の光景は静寂のうちに回想されることによって，詩人の心に蘇り，「静かな回復」を与えてくれたと思われる。これはワーズワスが詩論「抒情民謡集序文」で述べた「静寂のうちに回想された情緒」である。水仙の光景は，時間による浄化作用によって，いっそう詩人に喜びをもたらすものとなっていったのである。5年前のワイ河畔の光景も，回想されることによって同様の気持をもたらしたと言えよう。この感情は，現実の世界においては，自分も忘れてしまうようなささいな親切と愛の行為を導くものとなった。『序曲』第2巻では，少年時代のワーズワスが，自然と神に触れあいながら生きてきたことで，つつましい喜びに満足し，憎悪や低俗な欲望から遠ざかることができた次第が語られている。（*The Prelude*, Book 2, 443–448）

さらに5年前のワイ河畔の光景は，詩人の精神全体を感化させる体験，自然との融合をもたらすこともあった。5年前のワイ河畔の光景の回想によって，詩人は浄福の気分をもたらす神秘的体験を持つことができた。そのなかにあっては，人生の不可解な苦悩，重荷も一掃される。そして肉体は眠り，生ける魂（“a living soul”）（“Tintern Abbey” 46）となる。これは，『序曲』第2巻での少年時代のワーズワスが山頂から眺めた谷間の光景に恍惚の状態に入った心境を想起させる。谷間の静寂さに，恍惚状態に達したワーズワスは，「しばしば非常に神聖な静けさ

が，／私の魂全体を覆い，その結果，私は／自分の肉体の目のあることを忘れ，自分に見えるものが，／何か自分の内部にあるもの，夢のような，私の心の内部の風景のように／見えてくるのだった」（*The Prelude*, Book 2, 367–371）と述べている。これは少年時代にワーズワスが体験した，自身の中に自然から受けた一切の印象が溶解された時に生じる神聖な気分であった。ワイ河畔の「美しい形象」も，視覚を抑制し，「形や姿に汚されない」（“by forms / Or image unprofaned”）（*The Prelude*, Book 2, 325–326），詩人の心の中に溶解され，浄福の気分もたらすこともあった。

「霊魂不滅の頌」では，幼年時代には，地上の光景は，「天上の光」（“celestial light”）（“Ode,” I, 4）をまとい，「幻想的な輝き」（“the visionary gleam”）（“Ode,” IV, 56）を帯びていたが，成長するにつれそれが消滅した次第が語られている。その喪失を自覚した人間は「燃えさし」（“our embers”）（“Ode,” IX, 133）にすぎない。しかし人間の本性は「幻想的な輝き」をまだ完全に忘れ去ってはいない。ワーズワスが感謝と賛美の歌を捧げるのは，無意識の幼年時代の喜びや自由，素朴な信条のためではない。「久遠の喜び」（“Perpetual benediction”）（“Ode,” IX, 138）を生み出す少年時代の思い出に対してである。

> これらのために私は
> 感謝と賛美の歌を捧げるのではない。
> それは五官と外界の事物に対する
> 執拗な疑問のため
> 喪失と消失の感じのため（“Ode,” IX, 143–147）

このような少年時代の「五官と外界の事物に対する執拗な疑問」について，ワーズワスはフェニック（Isabella Fenwick）に送った手紙の中で次のように述べている。

> 私はしばしば外界の事物が外的存在をもつと考えることができなかった。私の見るすべてのものと，私自身の非物質的なものから離れたものとしてではなく，そのなかに内在するものとして交わった。私は登校の途中何度もこの唯心論的深淵から自分自身を現実に呼び戻すために壁や木につかまった。当時私はこのような精神過程を怖れた[17]。

幼児は，外界と自分を区別できない外界との一体感の状態にある。成長に伴い人間は外界との無意識の調和，外界との一体感を失う。しかし「燃えさし」のような成長した人間にも，外界との一体感の瞬間は訪れる。外界の事物を自分の外部にあるものとして把握できなくなったというこのような体験の時には，少年ワーズワスの精神は感覚を失い，恍惚の状態に入っていた。

その時少年時代のワーズワスは，現実の世界から連れ去られるという恐怖から，壁や木につかまった。このような恐怖の感情は時間によって緩和され喜びになった。これは静寂のうちに回想されることによって，自然から受けた一切の印象が詩人の精神の中で溶解された時に生じる，浄福の気分に通じるものである。

詩人に浄福の気分をもたらした神秘的体験は，「ものの生命」（“the life of things”）（“Tintern Abbey” 49）を透視する「調和の力と，喜びの / 深い力になごめられた眼」（“with an eye made quiet by the power / Of harmony, and the deep power of joy,”）（“Tintern Abbey” 47–48）によって，すなわち５年前の恍惚の境地に導いたワイ河畔の印象の記憶を静寂のうちに回想することによって，蘇ったのである。それは，詩人にとって「もっと気高いすがたの他の賜物」（“aspect more sublime”）（“Tintern Abbey” 36）であった。光景が詩人自身の内部に存在するものとなる神秘的体験は５年前ワイ河畔を訪れてから再訪するまで，何度も回想された体験であった。

3.　５年前のワイ河畔の光景の記憶についての考察

第三連
もしこれが空しい信念にすぎないとしたら―ああしかし
いくたびか暗黒のうちにあって
また味気ない白昼の多くの物影の只中にあって
無益ないらだちと世俗の狂熱が
私の心臓の鼓動を圧したとき
いくたび，心の中で，私は君にむかったことだろう。
嗚呼，森影のワイの流れよ，君，森の彷徨者よ
いくたび，私の心は君に向かったことだろう。（“Tintern Abbey” 49–57）

「暗黒のうちにあって / また味気ない白昼の多くの物影の只中にあって / 無益ないらだちと世俗の狂熱が / 私の心臓の鼓動を圧したとき」は，第二連での「淋しい部屋で，また町や都の / ざわめきの只中にあって，疲れを覚えるとき」を連想させる。「私の心」（“my spirit”）は，「心の中で」（“in spirit”）「いくたび」（“How oft”）５年前のワイ河畔に向かったことだろう。ワイ河畔を再訪するまでの都会での苦悩の生活のなかで，５年前のワイ河畔の「美しい形象」の記憶が，何度も詩人の心に蘇り，「静かな回復」を与えてくれたことを再認識した。森影の彷徨者であるワイ河畔の光景は，つねに「心の中で」人生の彷徨者である詩人と共にあった。しかし現実に目を向ける時，このような思いは「空しい信念」（“vain belief”）（“Tintern Abbey” 50）ではないかとも思われた。ジェラールはこの箇所について第二連末での浄福の気

分をもたらす神秘的な体験からの「低下」(“anticlimax”) と呼びながらも，作品全体においては需要な構成要素になっていると述べている[18]。詩人はここで5年前のワイ河畔の光景の記憶の意味に疑惑を抱くこともあったことを告白している。そして詩人はより人間と自然の強い絆，確かな確証を求めようとした。

4. 蘇った心の風景

第四連
そしていま，半ば消えた思いの閃きと
幾分は悲しい困惑を交えた
おぼろげでかすかな多くの思い出とともに
心の風景が再びよみがえってくる。
ここに私が立つ時，現在の喜びを感じるのみか
今後の年月のための生命と糧が
この瞬間にあるという楽しい思いが
ともなうのだ。願わくは，事実，そうあらんことを。(“Tintern Abbey,” 58–65)

再訪したワイ河畔の光景を前に，ワイ河畔の「心の風景」(“The picture of mind”) (“Tintern Abbey” 61) が再び蘇った。「心の風景」については，ズラント (Geoffrey Durrant) が，次のように説明している。

> 蘇った心の風景は，おそらく5年の年月を経て残されているおぼろげな印象である。それは，直接目の前にある光景を言及することにある。困惑は記憶の光景と現実の目の前にあるおぼろげな印象となった光景との間の一致と矛盾により生じる。これは，よく知っている場所を長く不在にした後帰還したすべての人が，経験するものである[19]。

5年前の感覚的陶酔は，「半ば消えた思いの閃き」，おぼろげな思い出となっていた。再び蘇った「心の風景」とは，再訪したワイ河畔を目前に詩人の心に映る光景であると言えよう。「心の風景」には，「幾分かは悲しい困惑を交えたおぼろげでかすかな多くの思い出」(“many recognitions dim and faint, and somewhat of sad perplexity”) (“Tintern Abbey” 59–60) が伴われていた。詩人の心境の変化は5年前と同じワイ河畔の光景の中で痛感されたのだ。「悲しい困惑」とは，第二連の後半で語られている自然から受けた一切の印象が詩人の精神の中に溶解された時に生じる浄福な気分をもたらした5年前のワイ河畔の記憶の光景と，蘇った「心の

風景」との相違によって生じるものである。5年前のワイ河畔の記憶の光景が神秘的体験を導いたことから，再訪したワイ河畔を目前に蘇った「心の風景」にも，「未来の生命と糧」（“life and food / For future years”）（“Tintern Abbey” 64–65）があるであろうという「楽しい思い」（“pleasing thoughts”）（“Tintern Abbey” 63）を抱こうとするのである。詩人はそうあることをあえて願うのである。詩人は意図的に未来に対する確証を得るために，過去の持つ意味から未来を類推しようとするのである。詩人は，過去にさかのぼって少年時代からの自然との体験を振り返る。

勿論私は，はじめてこの丘を訪れたときの
過ぎし日の私ではない。そのときは
のろ鹿のように山々を
深い川や淋しい流れのほとりを
自然の導くままに飛びまわったものだ。
それは自分の愛するものを追うよりは
恐ろしいものから逃げ出す人のようだった。
当時自然は（少年の頃の感覚的な喜びや
その動物的な運動の快感こそ失せていたが）
私にとってすべてであった。―当時の私のありさまを
描くことはむずかしい。鳴りひびく大滝は
情熱のように私につきまとった。
そびえ立つ岩と，山と，深く暗い森
その色と形は当時の私には
欲情であり，感情であり，愛であって
それには思想のもたらす高遠な魅力も
肉眼に由来しない興味も
必要ではなかった。―そのような時はすぎた。
そしてあのうずくような喜びと
目くらむ恍惚感も消え去った。（“Tintern Abbey,” 66–85）

詩人の心境の変化から生じた「悲しい困惑」は，「勿論私は，はじめてこの丘を訪れたときの過ぎし日の私ではない」（“Tintern Abbey” 65–66）という告白をさせた。5年前のワイ河畔訪問時には，自然はすでに「少年の頃の感覚的な喜びや / その動物的な運動の快感」，すなわちスケートなどの子供の遊びの「表面的な熱情」（“extrinsic passion”）（*The Prelude*, Book 1, 572）による無自覚な対象ではなくなっていた。5年前のワイ河畔訪問時の自然に対する情熱

は,「求めなくても与えられる滋養分によって」(“By nourishment that came unsought”)(*The Prelude*, Book 2, 7)培われていた。前述したように1792年パリからロンドンに戻ったワーズワスは，1793年，23歳の時に一人でソールズベリー平原からウエルズに徒歩旅行をする途中ワイ河畔に立ち寄った。自然の導くままに，飛びまわった5年前の詩人は，飢えた人間のようにワイ河畔の光景に自然の感覚的な美を追求して歩き回った。セリンコートは，フランス革命に伴う道徳的苦悩の反動として，詩人は「恐ろしいものから逃げ出す人」のように自然のなかに没入しようとしたと指摘している[20]。詩人は現実の世界から逃避するため，自然の感覚的な美を求めたと言えよう。『序曲』第11巻で述べられている視覚が心情の主人公になった状態のことである。(*Prelude*, Book 11, 171–199)滝の響きは情熱のように詩人につきまとい，そびえ立つ岩と，山と，深く暗い森の「色と形」(“their colours and their forms”)(“Tintern Abbey” 79)は「欲情であり，感情であり，愛」(“An appetite; a feeling and love”)(“Tintern Abbey” 80)であった。その時の自然はまるで詩人の恋人であるかのようであった。そして詩人は再訪したワイ河畔を前に，その当時の心境は思い出すことができないと語っている。これは,「うずくような喜び」と「目くらむ恍惚感」という言葉が示すように思想を伴うことがない感覚的陶酔である。セリンコートは，この時の心境について，詩人は自然に感覚的な喜びの中での気晴らしを求めたに過ぎなかったと述べている[21]。ズラントは，滝の響き，そびえ立つ岩と，山と，深く暗い森は，第一連で描かれた農家の地面，果樹園，生垣という静謐なワイ河畔の光景と対比した自然の世界の恐怖，未知で神秘的なものの畏敬を示唆していると述べている[22]。5年前のワイ河畔の光景は，詩人に感覚的な喜びの中での気晴らしをもたらすだけでなく，さらに恐怖，畏怖を伴う神秘的体験を導くものでもあった。5年前の詩人は，自然の印象が外的存在をもつものではなくなり，詩人の精神の内部に溶解されるという神秘的体験によって苦悩を脱却することができたのである。

5年の歳月は，詩人に心境の変化を認識させた。しかし詩人は，感覚的陶酔の喪失の代償を得たのである。

私は落胆もせず，嘆きもせず，愚痴もいわない。
ほかの賜物がついで至ったからだ。それは
この損失を償ってあまりあるものと私は信じたい。
私は思いに欠けた若者のようでなく
しばしば，烈しくもなく，軋りもせず
心をきよらかにし，なごめる力をもった
静かで悲しい人間性の調べをききながら
自然を眺めるようになった。(“Tintern Abbey,” 85–93)

「うずくような喜び」と「目くらむ恍惚感」という感覚的陶酔の喪失感は，「ほかの賜物」（“other gifts”）（“Tintern Abbey” 86）をもたらした。それは，この喪失を補うには「余りある報酬」（“Abundant recompence”）（“Tintern Abbey” 88）であると信じられるものである。感覚的陶酔は，「心をきよらかにし，なごめる力」（“ample power / To chasten and subdue”）（“Tintern Abbey” 92–93）をもった「静かで悲しい人間性の調べ」となった。再訪したワイ河畔を前に蘇った「心の風景」と，5年前の感覚的陶酔をもたらしたワイ河畔の記憶の風景との相違が，詩人の精神に「静かで悲しい人間性の調べ」を実感させたのである。ブルームは「静かで悲しい人間性の調べ」とは，「人間の聴覚ではなく，心に響く調べである。その調べのなかで，人間の儚さと自然との離れることのない絆の証を聞くのである」と説明している[23]。ウイリー（Basil Willy）は，「人間性の調べは，距離によって浄化されて，平静でもの悲しいときのみ，彼を訪れ再生される」[24]と述べている。ワイ河畔を前に，感覚的陶酔の喪失の悲しみを実感した詩人は，現実の世界のなかで有限の人生を生きる人間の儚さを実感した。

「霊魂不滅の頌」では感覚的陶酔の喪失を自覚し，人間の儚さを見続けてきたワーズワスの眼に日没を囲む雲は，「落ち着いた色合い」（“a sober colouring”）（“Ode,” XI, 201–202）を帯びるようになったと歌っている。そして「人間の苦悩から湧き上がる / 心なごめる思いに」（“In the soothing thoughts that spring / Out of human suffering”）（“Ode,” X, 187–188）力を見出そうと決意する。これは，ワイ河畔を再訪した詩人が実感した「静かで悲しい人間性の調べ」に通じるものである。「静かで悲しい人間性の調べ」は，詩人に人間の儚さと新たな自然との離れることのない絆の証を自覚させた。詩人の精神は，自然から独立し，自然は詩人にとって外的な存在となった。苦悩を経て，人生に悲哀を抱く詩人に，外的な存在となったワイ河畔は，「心なごめる思い」を与えた。

「想像力，それがどのように害われ，また回復されたか」（Imagination, How Impaired and Restored）という副題が付けられた『序曲』（*The Prelude*）第11巻では，ワーズワスがフランス革命などの時代風潮による精神的堕落から，惰性を振り落して再び大自然の面前に立つことができたのは，人の命を甦らせてくれる力をそなえた「時の流れの点」（“spots of time”）（*The Prelude*, Book 11, 258）となった自然との体験を想起することによってであると述べている。「時の流れの点」の一つは，ワーズワスが6歳の頃，従僕のジェイムスと共に胸をときめかせて馬の背にまたがり山路を昇って行った時の体験である。ワーズワスはすぐ道案内人ジェイムスとはぐれる。ワーズワスは突然不安に襲われ馬を降りて，石ころだらけの沼地へと馬を引いて行き，昔死刑場のあった場所に出てきた。近くの芝地には殺人を犯した人の名前が刻まれていた。ワーズワスはその場を離れ，共有地に登った。その時共有地から見た光景は，何の変哲もない普通の光景だった。しかしむき出しの池，小高い丘の上のわびしい望楼，そして吹きつける強風に着物をあおられ，吹き上げられて当惑している女の人を見たワーズワスは，「あの幻影のようなもの寂しさを / 描き出そうとすれば，人間にはまだ知らされていない様々な /

色どりや言葉などが，きっと必要になってくることだろう」（“but I should need / Colours and words that are unknown to man / To paint the visionary dreariness”）（*The Prelude*, Book 11, 309–311）と語っている。この場所の光景の自然物は，ワーズワスにとって外的な存在である。これは，感覚的陶酔を享受していた少年時代のワーズワスにとっての自然物とは異なっている。感覚的陶酔のなかでワーズワスの精神は，自然物は日常の見慣れた姿とは異なった姿となり，自然と融合したのであった。「時の流れの点」となったこの光景では，少年ワーズワスの思いは自然より人間の世界に向けられている。外的な存在となった自然の光景が，ワーズワスにとって人の命を甦らせてくれる力をそなえた「時の流れの点」になったのは，死刑場という場所から受ける人間にとって耐え難い犯罪と死という現実が，道案内人からはぐれ不安に駆られている少年ワーズワスの感情と重なり，忘れられない印象を与えたのであろう。このような衝撃によって哀感を抱いた少年ワーズワスの精神が，何の変哲もない普通の光景に投射され，「あの幻影のようなもの寂しさ」を帯びた光景になった。このような体験は「人間の精神が主人公となっていて / 外面的な知覚は，精神の意志にきわめて従順な従僕にすぎないことを / 深い感動を持って，われわれが体験できる」（*The Prelude*, Book 11, 270–271）ものである。何の変哲もない普通の光景が，「時の流れの点」として意味を持ったのは，衝撃を受けた少年ワーズワスの精神によるものである。すなわち人間の精神が主人公となっている体験と言えよう。そしてワーズワスが少年時代の自然との融合をもたらした想像力を回復することができたのは，このような「あの幻影のようなもの寂しさ」という感情を帯びた自然との体験を想起することによってであった。ワイ河畔を目前にして人間の儚さを実感した詩人の心に響く「静かで悲しい人間性の調べ」にも，「あの幻影のようなもの寂しさ」の感情が伴われていたと思われる。

ワーズワスが「あの幻影のようなもの寂しさ」という感情を帯びた自然との体験を想起することによって想像力を回復したように，「あの幻影のようなもの寂しさ」の感情を帯びた再訪したワイ河畔の光景も，少年時代の詩人の精神と自然との融合という想像力による体験を想起させたのである。

また私は
高遠な思いのもたらす歓喜で私をゆすぶる
ある存在を感じるようになった。それは
遥か深く混じりあった，あるなにものかの崇高な感じ
その住みかは落日の光であり
円かなるわたつみであり，生ける大気であり
青空であり，また人の心のなかにあり
あらゆる思考するもの，あらゆる思考の

あらゆる対象を動かし，万象を貫き流れる
運動であり精神であるものだ。
だから私は，いまだに牧場や，森や，山々を愛し
この緑の大地から見る一切のもの
耳目にふれるこの宏壮な世界
耳目が半ばつくり，また受け取る一切のものを
愛するのだ。そして自然と感覚の言葉のうちに
私の最純の思想のいかりとなり
私の心を育み，導き，守り，私の人間存在の
核心となるものを見出して喜ぶのだ。（“Tintern Abbey,” 93–111）

これは，『序曲』第2巻で語られている17歳に達したワーズワスが体験した神秘的体験を類推させるものである。17歳のワーズワスは，自然の「一切の事物のうちに，一つの生命を観てとり，しかもそれが / 喜びであることを実感した」（“in all things / I saw one life, and felt that it was joy”）（*The Prelude*, Book 2, 428–430）と述べている。その時肉体の耳は一つの歌の調べによって圧倒され，その機能を忘れていた。彼の感覚は失われていた。少年ワーズワスの精神が自然と融合できたのは，自然と精神がともに「一つの生命」を共有していたからであったと言えよう。「ティンタン寺院」で歌われている「高遠な思いのもたらす歓喜で私をゆすぶる / ある存在」（“A presence that disturbs me with joy / Of elevated thought”）（“Tintern Abbey” 94–95）とは，「一つの生命」を示唆していると思われる。少年ワーズワスの神秘的体験が，「ティンタン寺院」の思想の原点となっているのである。「ティンタン寺院」では「一つの生命」の共有は，「遥か深く混じりあった，あるなにものかの崇高な感じ」（“a sense sublime / Of something far more deeply interfused”）（“Tintern Abbey” 95–96）をもたらした。それは自然物だけでなく「人の心のなかにあり / あらゆる思考するもの，あらゆる思考の / あらゆる対象を動かし，万象を貫き流れる / 運動であり精神」として表現されている。外的な存在となった自然物と「一つの生命」を共有していることを知覚した詩人は，自然と人間が深く混じりあっているという崇高な気分を与えられるようになった。このような詩人にとっては，牧場や，森や，山々，緑の大地から見る一切のものへの愛は変わることはない。再訪したワイ河畔を目前に蘇った「心の風景」と5年前のワイ河畔での記憶の風景の変化は，このように少年時代の詩人の精神と自然との融合という体験を思想化することによって，外的な存在となった自然と自身との関係の確証を得ようとした。

『序曲』第13巻では，想像力によって自然と人間の精神が融合される過程が描写されている。偉大な人間の精神は「本来の自己の内面から，大自然と同じ / 変化させる力を放出し，自らのちからで同様の / 実在を造り出し，また，自然が彼らのためにそうしたものを / 造り出し

てくれれば，直ちにそれを直感的に把握する」。（*The Prelude*, Book 13, 93–119）ここでの「耳目にふれるこの宏壮な世界 / 耳目が半ばつくり，また受け取る一切のもの」とは，このような想像力の働きを述べていると思われる。すなわち，自然の事物と人間の感覚の交互作用によって，「一つの生命」を共有している人間と自然は混じりあうことができる。「私の最純の思想のいかり」（“The anchor of my purest thoughts”）（“Tintern Abbey” 109）とは，自然と人間との相互交流関係を説明する思想である。純粋な感覚的陶酔を享受した5年前のワイ河畔の自然は今や，思想の介在によって詩人と分離されることのない強い絆で結ばれたのであった。こうして第三連でのワイ河畔の光景の記憶の意味に対する疑惑は解消された。5年前のワイ河畔の記憶の光景は，回想によってこれからも詩人の精神と融合されることは確証された。

5.　終結部

第五連
またたとえ私が，この教えを受けなくとも
私の天分を朽ちるにまかすべきでない。
それは貴方が此処，うるわしい川の岸辺に
私とともにいるからだ。私の最も親しみ
最も愛する友よ，私はあなたの声に
過ぎし日のわが心の言葉をとらえ
あなたの狂おしい眼の輝きに
過ぎし日のわが喜びをよみとるのだ。（“Tintern Abbey,” 112–119）

最終連第五連は，ワイ河畔の光景の描写ではなく，現実の世界に戻りワイ河畔に詩人と共に立つ妹ドロシーへの勧告で完結する。詩人の天分（“my genial spirit”）（“Tintern Abbey” 113）は，衰退させてはならない。第四連で到達した自然と人間との絆の思想は，教えられる，意図的なものであってはならないのだ。詩人の目は，今もなお，詩人の少年時代の恐怖を伴う自然との関係を持ち続けている妹ドロシーへ向けられる。第二連で5年前のワイ河畔の記憶の光景がもたらした神秘的体験について言及しながらも，第三連で，それを「空しい信念」にすぎないのではないかと述べていたように，第四連での思想にも幾分かの疑惑を抱いているのである。第三連が5年前のワイ河畔の光景の記憶についての考察であったように，終結部第五連は，この詩の主題であった想像力についての考察である。詩人は妹ドロシーの思想性が交じらない感覚的な自然との関係を築いている彼女の声に「過ぎし日のわが心の言葉」を，彼女の「狂おしい眼の輝き」によって「過ぎし日のわが喜び」をあたえられるのである。

しかし，ああ，懐かしの妹よ，いましばし
私はあなたのうちに，過ぎし日の
私自身の面影を見たい。私がこの祈りを口にするのは
自然は決して己の愛したものを
裏切らなかったことを知るからだ。
われわれの生涯の年々を通じて，喜びから喜びへと
導き行くのが自然の特権だ。自然はかくして
われらのうちなる心に霊感をあたえ
静寂と美を印して，気高い思いをはぐくみ
悪口も，軽率の判断も，利己人の嘲りも
真心に欠けた挨拶の言葉も
日常生活の味気ない交際も
われらを挫き得ず，またわれらの目にする一切は
祝福に充つという信念を
乱し得ないようにするのだ。（“Tintern Abbey,” 119–134）

詩人は過ぎし日の自身の面影を妹ドロシーの中に見ようとする。ブルームは，妹ドロシーは，詩人の少年時代の「具現」（“incarnation”）であると指摘している[25]。それは，第四連で詩人が到達した思想は，少年時代の恐怖を伴う自然と精神との融合体験を原点としていたからである。思想の介在によって自然は，詩人をこれからも裏切ることなく喜びへと導いてくれるだろう。心に霊感をあたえる体験は，静寂と美をもたらし，詩人に「気高い思い」（“lofty thoughts”）（“Tintern Abbey” 128）をはぐくみ，道徳的に感化し続ける。自然はすべて祝福に満ちている。

だから月が
ひとり歩むあなたを照らし
霧深い山風があなたを
自由に吹くがよい。そして後年に
これらの狂おしい陶酔が円熟して
平静の喜びとなるとき，あなたの心が
あらゆるうるわしい姿かたちを容れる屋形となり
あなたの記憶があらゆる甘美な音や調和の
住み家となるとき，嗚呼そのとき
もしも孤独や，恐れや，苦しみや悲しみが

あなたを襲おうとも，どんなに穏やかな
こころ温まる思いで，あなたは私を
また私の勧めを思い出すことだろう。
また私があなたの声をもう聞くことが出来ず
またあなたの狂おしい眼から過去の生涯の閃きを
聞き得ないところにいても
あなたはこの楽しい流れの岸辺に
ともに立ったことを忘れないだろう。（“Tintern Abbey,” 134–151）

詩人は，月が照らす霧深い山風での孤独な散策を妹に勧める。なぜならこのような恐怖を伴う自然との交わり「狂おしい陶酔」（“wild ecstasies”）（“Tintern Abbey” 138）は回想によって，時間による浄化作用によって「調和の力と，喜びの深い力になごめられた眼」によって，「平静の喜び」（“a sober pleasure”）（“Tintern Abbey” 139）になるからである。ワーズワスは，「序曲」第１巻で人間の精神を音楽の響きにたとえ，一切の恐怖，幼年時代の悲惨，嘆き，いらだたしさ，精神に注ぎ込まれたすべての思想や感情は，本来の自己に立ち返った時に，はじめて自分のものとなる「静謐な実存」（“The calm existence”）（*The Prelude*, Book 1, 360）となる，不協和音を融和させる想像力の働きについて述べている。「狂おしい陶酔」，恐怖を伴う神秘的体験の記憶の風景は，後年になり円熟して「あらゆるうるわしい姿かたちを容れる屋形」「あらゆる甘美な音や調和の住み家」という調和された記憶の風景となる。妹ドロシーが孤独や，恐れや，苦しみや悲しみに襲われるとき，これらの記憶の風景は蘇り，「穏やかなこころ温まる思い」（“healing thoughts of tender joy”）（“Tintern Abbey” 144）で詩人と詩人の勧告を思い出すであろう。それは，詩人亡き後も忘れられることはないだろう。第二連で語られた５年前のワイ河畔の記憶の光景が「美しい形象」となり，詩人の精神に喜びを与え続けたように。

また私が久しく自然の崇拝者として
その奉仕に倦まず，以前にもまさる愛情と
さらに聖なる愛情から生まれる
遥かに深い熱意をもってここに来たことを。
またそのときあなたは思いおこすだろう。
幾多の彷徨のあと，久方ぶりに訪れた
この険しい森とそそり立つ断崖と緑の田園の風景は
私にとってそれ自体，またあなた自身の故に
別して親しいものになったことを。（“Tintern Abbey” 151–159）

再訪したワイ河畔を前に「自然の崇拝者」であり続けている詩人は，5年前の「うずくような喜び」「目くらむ恍惚感」という感覚的陶酔の喪失を自覚し，「あの幻影のようなもの寂しさ」の感情が伴った「静かで悲しい人間性の調べ」を耳にし，人間の儚さを実感した。詩人はワイ河畔の光景を，「静かなこころの状態」のなかで，「以前にまさる愛情」（“With warmer love”）（“Tintern Abbey” 154）と「さらに聖なる愛情から生まれる遥かに深い熱意よって」（“with far deeper zeal / Of holier love”）（“Tintern Abbey” 154–155）眺めることができるようになったと歌う。5年前の感覚によってとらえられたワイ河畔の荒涼な光景は，調和と統一が保たれた静謐な光景になった。第一連で描写された静謐なワイ河畔の光景は，単に外的なワイ河畔の自然物ではなく「静かなこころの状態」に達した詩人の心を投射している。「この険しい森とそそり立つ断崖」（“these steep woods and lofty cliff”）（“Tintern Abbey” 157）は，5年前のワイ河畔での恐怖，畏敬を伴う体験であり，少年時代の自然との融合，神秘的体験を象徴している。「この緑の田園の風景」（“this green pastoral landscape”）（“Tintern Abbey”, 158）は，再訪したワイ河畔と詩人との関係を象徴している。「この険しい森とそそり立つ断崖」と「この緑の田園の風景」は，自然物と少年時代の詩人の「具現」である妹ドロシーの存在によって，より親密なものとなった。詩人の過去と現在，そして未来は回想という想像力の働きによって繋がったのである。

結び

5年前の神秘的体験を導いたワイ河畔の記憶の光景と，再訪したワイ河畔を目前に蘇った「心の風景」との相違によって，詩人は自身の精神に生じた喪失と代償を自覚した。詩人の精神の変化によってワイ河畔の光景は，「あの幻影のようなもの寂しさ」という感情を伴った「静かで悲しい人間性の調べ」を奏でるものとなった。そして詩人に有限の生を生きる人間への愛を深めた。『序曲』の縮図とも言える「ティンタン寺院」には，有限の生を生きる人間に対する悲哀と愛おしさが漂っている。「ティンタン寺院」には，人間の儚さ，無常感が通底している。「ティンタン寺院」は，次の大作「幼時の回想に由来する不死の暗示」（“Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood”）と副題が付けられた「霊魂不滅の頌」の創作へとワーズワスを導いた精神の軌跡を辿るうえで重要な作品であると思われる。

「ティンタン寺院」は，ワーズワスの詩論の根幹である想像力の表現とも言える。ワーズワスは，「ティンタン寺院」の創作によって少年時代からの自身の想像力の変遷を辿り，未来へと繋ぐことができたのである。そこでワーズワスは，「ティンタン寺院」を完結したとき，幾分かの疑惑を抱きながらも自然と人間がともに「一つの生命」を共有し，強い絆で結ばれるという思想の介在によって，「楽しい状況」に到達していたのだろう。このように「ティンタン

寺院」は，詩人の想像力と自然との関係の省察である。詩人の精神が投影された「ティンタン寺院」を読むには，このような詩人の精神を主体とした考察は不可欠であると思われる。

注

① “Tintern Abbey” 及び “Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” の引用は，William Wordsworth, *The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. Ernest de Selincourt and Helen Darbishire (Oxford: Clarendon, 1940–1949) による。“Tintern Abbey” 及び “Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” の和訳は『ワーズワス詩集』前川俊一訳（東京，弥生書房，1974 年）を用いた。

② *The Prelude* の引用は，William Wordsworth, *The Prelude, or Growth of a Mind*, ed. Ernest de Selincourt, rev. Helen Darbishire (Oxford: Clarendon, 1959)

The Prelude には，1805 年版と 1850 年版が存在する。1805 年版をテキストとしたのは，ワーズワスが最も詩精神の旺盛な時期といわれる頃に完成した初稿であるからである。通例ワーズワス研究には，1805 年版テキストが用いられる。*The Prelude, or Growth of a Mind* の和訳は『ワーズワス・序曲』岡三郎訳（東京，国文社，1974 年）を用いた。

1) Marjorie Levinson, *Wordsworth's Great Period Poems: Four Essays* (Cambridge University Press, 1986), 17.
2) Bate Jonathan, *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (London and New York, 1991), 40.
3) William Gilpin, *Observations on the River Wye, and Several Parts of South Wales, etc. relative chiefly to Picturesque Beauty; made in the summer of the Year 1770*, 3rd edn (London: R. Blamire, 1972)
4) 大石謡子「“How often has my spirit to thee” ―「ティタン寺院の数マイル上流で書かれた詩」におけるワーズワスの自然観」『イギリス・ロマン派研究』第 42 号，イギリス・ロマン派学会，2018 年。1–14 頁。
5)「ワーズワスの人間愛―「決意と独立」再考―」『京都産業大学論集』第 52 号，2019 年。261–279 頁。
6) Halold Bloom, *The Visionary Company: A Reading of English Romantic Poetry* (New York: Cornell University Press, 1971), 131.
7) E.de Selincourt, *The Prelude*, 570.
8) Mary Moorman, *Wordsworth: A Biography. The Early Yeasrs*, 1770–1803, (Oxford: Clarendon Press, 1957), 401–402.
9)「ワーズワス『ティンタン寺院』」『関西英米文学手帖』26 号，1988 年。関西英米文学研究会，23–31 頁。
10) J. F. Danby, *The Simple Wordsworth: Studies in the Poems*, 1797–1807 (London: Routledge and Kegan Paul, 1960), 9.
11) Geoffrey Durrant, *William Wordsworth* (New York: Cambridge University Press, 1969), 35.
12) Geoffrey Durrant, *William Wordsworth* (New York: Cambridge University Press, 1969), 36.
13) F. W. Bateson, *Wordsworth: A Re-Interpretation* (London: Longmans, 1956), 141.
14) Albert S. Gerard, *English Romantic Poetry: Ethos, Structure, and Symbol in Coleridge, Wordsworth, Shelly and Keats* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1968), 102.
15) William Wordsworth, “Preface to Lyrical Ballad (1801),” *The prose Works of William Wordsworth*, Vol. 1, eds. W.J.B. Owen and Jane Worthington Smyser (Oxford: Clarendon, 1974), 49. この箇所の和訳に関しては，『イギリス詩論集（上）』岡地嶺訳（東京：中央大学出版部，1980 年）を用いた。
16) Hazard Adams, *The Interests of Criticism* (New York: Hartcourt, Brace & World, 1969), 7–8.
17) *The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol, 4, ed. Ernest de Selincourt and Helen (Oxford Clarendon, 1940–1949), 463.

18) Albert S. Gerard, *English Romantic Poetry* (University of California Press, 1968), 107.
19) Geoffrey Durrant, *William Wordsworth* (Cambridge University Press, 1969), 40.
20) E.de Selincourt, *The Prelude*, 570.
21) E.de Selincourt, *The Prelude*, 570.
22) Geoffrey Durrant, *William Wordsworth* (Cambridge University Press, 1969), 40.
23) Halold Bloom, *The Visionary Company*: *A Reading of English Romantic Poetry* (New York: Cornell University Press, 1971), 135.
24) Basil Willey, *The Eighteenth-Century Background: Studies on the Idea of Nature in the Thought of the Period* (London: Penguin Books, 1967), 274.
25) Halold Bloom, *The Visionary Company*: *A Reading of English Romantic Poetry* (New York: Cornell University Press, 1971), 137.

From Love of Nature to Love of Man

A Consideration of William Wordsworth's "Tintern Abbey"

Junko SEKI

Abstract

"Tintern Abbey," written by William Wordsworth at the age of 28, is one of the most significant poems in English Romantic period. This poem is formally entitled "Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey, on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour, July 13, 1798." Wordsworth visited the banks of the Wye five years before he wrote this poem. This poem reflects a change of mind from the first visit in 1793 to the revisitation in 1798.

In 1793, Wordsworth, despairing over the gravity of the French Revolution, found comfort in nature along the banks of the Wye. Moreover, he experienced a fusion with nature along the banks of the Wye, which greatly impacted his mind because of his imagination. That is, his experience brought him to ecstasy through his mystic experience with nature.

In 1798, however, the sight of the banks of the Wye during his revisitation became a tranquil experience rather than an ecstatic one. During this revisiting, he recollected his ecstasy through tranquility and found the significance of his previous ecstatic experience. Moreover, his loss of ecstasy coupled with thoughts of human mortality led him to his new understanding of the relation between nature and man. That is, the transition from love of nature to love of man can be achieved in recollection in tranquility. Subsequently, Wordsworth's love of man grew deeper and deeper.

Although a number of studies have been made on "Tintern Abbey," little is known about the poet's mind. This paper focuses on the poet's mind.

Keywords: William Wordsworth, "Tintern Abbey," mystic experience, tranquility, recollection